
僕と幻想郷と召喚獣 外伝

影月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幻想郷と召喚獣 外伝

【Zコード】

Z6091Z

【作者名】

影月

【あらすじ】

僕と幻想郷と召喚獣の過去編です。バカテス欄にありますが、メインは東方で明久しかでません

アート（繪畫術）

読みにくいかも…

予告

「やあ、また来たね」

「夢?」この頃よく見るな…」

「赤い霧、異変ね。面倒ね」

「明久がしたいよつすればいい」

「あなたは食べてもいい人間?」

「な、勝手に私の領域に入るなー!!」

「私は門番です。如何なる理由があるつと、許可なく此処は通せません!ー!ー」

「…貴方…私の能力が効かないのですか?」

「そう、私が此処の主…レミリア・スカーレットよ」

「お兄さん遊びましょう」

「結界を張つてゐるから、その子の治療を早く…！」

「お願い、明久！　目を覚まして……！」

「君は絆を力に出来る。それは君を導く光になる」

「もうお姉様なんか…こんな世界なんか大っ嫌い！！」

「それが君達を苦しめる鎖だと誓いのなう...」

「僕は、
運命を殺つてみせる！――！」

僕と幻想郷と召喚獣外伝

紅魔館赤い霧編

近日公開！！

「偶然とは言え『真理の扉』を開けてしまった君は選択に迫られる…
…でも、私は信じてるよ明久…」

予告（後書き）

あるアニメの次回予告見たいに書きました

第1話 紅魔館赤い霧変 始まり（前書き）

時間系列は適当です

第1話 紅魔館赤い霧変 始まり

「・・・・・・・」

「あら、また来たのね」

声が聞こえる・・・でも暗くて見えないし、動けない・・・

「精神体だけとはいこつも・・・に何度も来るなんてありえないわよ?」

此処は何処だろうか・・・聞きたいけど声も出ない

「そうそう、今日貴方は大切な選択にせまられるわ。頑張りなさいね」

そして僕は沈んでいく・・・

「また・・・あの夢か・・・」

声だけが聞こえる夢・・・だけど夢にしてはものすごくリアルだ・・・

「大切な選択?」

そう、これは運命の始まりであり、僕こと吉井明久の始まりのお話

僕は中学生開始を4月に控え、休みなので幻想郷に来ていた。

「幻想郷」・・・それは妖怪、人、神、いろいろなモノたちが共に暮らす世界だ

「さて、起き・・・外が赤い？」

外は赤い霧で包まれていた

「おはよう、慧音」

「やあ、おはよう明久」

「これって・・・」

「ああ、外か。多分異変だろ?」

異変・・・ってことはやっぱり靈夢は動くのかな?」

「巫女のことが心配か?」

「え? あ、うん。やっぱ友達だしね・・・」

「気になるなら行つてもかまわないよ」

「え・・・」

「明久がしたいよつすればいい」

「慧音・・・」

「た・だ・し! 無事に帰つてくること。これだけは約束してくれ」

「・・・うん! わかった、行ってくるよ」

僕は慧音宅を飛び出し、博麗神社へと向かつた

少年移動中

「靈夢～」

「あ～り？ 明久来たの？」

「お～、明久じゃねえか」

「あ、魔理沙もいたんだね」

神社に着くと魔理沙もいた

「靈夢、これってやつぱり・・・」

「ええ、異変ね。面倒よね」

「あはは」

いつもおつだな

「明久はどうするの？」

「心配だし、ついて行くよ」

「わかつたわ」

「でどこ行くんだ？」

「やうね・・・」

靈夢が僕を見てくる

「靈夢の感ぢおり行けばいいと思つよ」

「それもそうね。なんだかあつちのほつが霧濃いし、あつち行きま
しょう」

「了解

「んじや、いくわ」

僕達は出発した

第1話 紅魔館赤い霧変 始まり（後書き）

現時点での明久

靈力と魔力がちょっと使える

空の飛行は浮けるがそこまで飛べない

回避、感、体力に関しては幽香のおかげで高い

能力は曖昧だが意識下であれば干渉が効かないことだけは自覚している

第2話 紅魔館赤い霧変1 間ど？（前書き）

簡単に言おう！戦いなんてなかつた

第2話 紅魔館赤い霧変1 間ど？

僕達は走っていた・・・なぜかとこいつと・・・

「なんで妖精たち襲つてくるんだよ！？」

「この霧のせいで興奮してるとんだとと思うわ」

「迷惑だな！！」

妖精達が行き成り弾幕を放つて来たからだ
相手にしてるとこいつちが疲れるのでスルーしてたけど・・・

「靈夢！一一番密集してるとこ这儿！」！？

「え？えっと右らへんよ」

「魔理沙やるよ！！」

「なるほどね、わかつたぜ」

僕と魔理沙は少量の弾幕をそこには投げた

「よし、結構片付いたね」

「考えたわね」

「確かに広範囲に撃つより、密集したとこに撃つたほうがあてやすいもんな」

少しあいた所に来ると妖精からの攻撃がやんだ

「・・・あれは・・・」

前方の方から黒い塊がふよふよと飛んできた

「妖怪？」

「多分そうじゃないの？」

そう話していると塊は形を崩し始め金色の髪を肩口まで伸ばし、黒っぽい服を着て頭の方には赤いリボンを付けた少女が現れた。

「君は？」

「うーん？ 私はルーミアだよー」

話せるみたいだね

「ね～ね～」

「? なに？」

「あなたは食べてもいい人間？」

いきなり物騒である

「ダメに決まってるでしょ」

たしかに、大丈夫だと答える人間はいない

「え～でもお腹空いたしな・・・」

「・・・あ、じゃあこれ食べる？」

「? なに？」

僕はおにぎりを取りだしルーミアにあげた

「わ～い」

(二人とも今のうち元・・・)

(わかつたわ)

(了解だぜ)

「まだあ・・・ってあれ?」

ルーミアが気づいたころには僕達は逃げていた

「意外と逃げれたわね・・・」

「追いかける気はなかつたみたいだしね」

「でも、さすがに疲れたな・・・」

ずっと走っていたためか足がちょっとしつこい・・・

「そうだねちょうど湖で見晴らし良いし

「休憩しましょうか

僕達は休憩しようと立ち止まると、いきなり氷柱が飛んできた

「おひと

「勝手に私の土地に入るなー!!」

そこには氷の羽の妖精が・・・

「あ〜チルノか

「チルノ?」

「あの妖精の名前よ」

「そして自称サイキョーのバカだ

魔理沙・・・その言い方は・・・

「相手にするのもだるいわね・・・」

「時間がかかりそうだね」

「じゃあ吹き飛ばすか」

「「え?」「

魔理沙の発言に振り向くと・・・三一八卦炉を取り出しあり・・・

「いぐぞ!!--

「え?」

あ、あれは・・・

「恋符」マスタースパーク」――

「わにゃ・・・・・」

「不意打ちね・・・・」

「そうだね・・・・」

魔理沙のはなつた極太レーザーはチルノを軽々と飲み込み、吹き飛ばした

「さ、邪魔は居なくなつたし休憩しようぜ」

「・・・・・」

時折この子の行動が恐ろしい・・・

第2話 紅魔館赤い霧変1 間ど？（後書き）

昔、マジでチルノは中ボスかな？と思つてた時期があつた

紅魔館赤い霧変2 門番（前書き）

やつぱり戦闘シーン下手だな・・・

僕たちは休憩していると

「あやや～、」にいましたか～」

空から文が飛んできた

「どうしたのよ、パパラッチ」

「失礼な！私は清く正しい射命丸文ですよ～」

「文、どうしたの？」

「あ、明久君もいたんですね。いや～異変について聞こうと神社に向かつたのですが、もうお出かけになられてて探してたんですよ」

「山は大丈夫なの？」

「警備をしろと言われましたが・・・抜け出してきました（キリッ）」

「アハハハハ」

文らしいな

「そういえば・・・文

「はい、なんでしょうか？」

「どうもこっちが霧が濃いみたいだけど何かあるの？」

「こっちですか？たしか紅魔館ですね」

「紅魔館？」

「吸血鬼の住む館ですよ」

吸血鬼か・・・霧・・・吸血鬼・・・

「なるほど・・・」

「どうかしたの？明久」

「いや、今回の異変の犯人その吸血鬼かもって思つてね」

「たしかにレミリアさん口光苦手そうでもんね」

「レミリア？」

「レミリア・スカーレット、紅魔館に住む吸血鬼ですよ」

まあ断定できないけど・・・

「紅魔館に向かおう」

「だな」

「では私も取材でついていきます」

「うして僕たちは紅魔館へと向かつた

s.i.d e 靈夢

「・・・文」

紅魔館に向かいながら、私は明久にばれないように文に話しかけた

「はい、何でしちゃが？ 靈夢さん」

「あんた明久に結構ペラペラと話してたけどいいの？」

こいつは結構話をはぐらかしたりするのに、明久が質問している時すらすらと事實を話していた。

何を考えているの？ こいつは・・・

「別に問題ありませんよ。今さらですしお」

「今さら?」

「これでも私は靈夢さんより明久君と付き合い長いんですよ?それに・・・」

たしかにこいつのほうが長いわね・・・

「明久君に対してなぜだか話をはぐらかしたりできないんですね」

「確かにそうね・・・あの隙間妖怪ですら明久といふと胡散臭くないし」

「それは是非とも見てみたいですね」

やめときなさい・・・なんだか世界の終わりを見た気分になるから・
・

慣れたけど

side 明久

妖精からの襲撃を回避しながらも僕たちは紅魔館の前にたどりつく
が・・・

「止まりなさい!――」

僕たちの前に赤い髪のチャイナ服を着た女性が立ち塞がつた

「あの人は・・・」

「彼女は紅美鈴という妖怪ですよ」

「あ、妖怪なんだ」

「はい、そしてここが門番です」

「私たちは」の主に話があるの退いてくれないかしり?」

靈夢が美鈴に話しかけるが

「私は門番です。如何なる理由があつて、許可なく」は通せません!」

「どうしても?」

「お嬢様から誰も通すな、と言われていますので」

多分」「で済たりかな

「仕方ないわね、私が行くわ」

「大丈夫? 瞬夢」

「靈夢さん、彼女は接近戦が得意なのでお気をつけ」

「わかつたわ。行つてくる」

「ついして靈夢と美鈴の勝負が開始した

「しかし意外だぜ・・・」

「何が?」

「こんなこと起しきながら、ちゃんと弾幕勝負するんだなってな

「それは確かに。結構浸透したみたいだね」

「鳥天狗総勢で広めましたからね」

「うん、あの時は本当にありがとね」

「いえいえ、明久君の頼みですか?」

「お、結構面白いことになつてるぜ?」

弾幕勝負は、靈夢はある一定で距離を置き、美鈴に関してはどうとも遠距離戦は苦手らしく戦況は靈夢に傾いていた

「へつ…彩符「極彩颶風」…。」

どうも押し切られる前に状況を変えようとじつめつだ

彼女から様々な色の弾幕が零れ落ち、雨のように靈夢に降り注いだ

「ひづ」

靈夢もさすがに攻撃しながら避けないと踏んだのか、弾幕をやめ、回避に専念している

しかし

「甘いわね、夢符「封魔陣」」

靈夢はお札を投げると、札は分裂し美鈴の弾幕をよけながら彼女に殺到する

美鈴はまさかあのタイミングで攻撃が来るとは思ってなかつたらしく命中

煙がはれると氣絶していた

「あ、進むわよ」

「ううだね」

僕は彼女を壁の近くに寝かせ門をくぐった

紅魔館赤い霧変2 門番（後書き）

「……」この文はそこまでパパラッチじゃない！——多分

紅魔館赤い霧変3 七曜の魔女（前書き）

友「影月！…明久のテーマ曲決めたぞ！…」
影「考えたじやなくて決めたんだね…」

友「深蒼つてやつで聞くか？」

影「いや、持てるからいい」

友「…」

サブタイトルは彼女の二つ名です

紅魔館赤い霧変3 七曜の魔女

「赤いね・・・」

僕は紅魔館に入つて最初に言つたのはこの一言だつた
壁、絨毯すべて真つ赤なのだ

「悪趣味ね・・・」

「吸血鬼だし仕方ないんじゃね?」「
「ところどころに向かうのですか?」

文の言つとおりだね・・・

「文、レミリアって日光苦手なんだよね?」「
「そうですがどうかしましたか?」「
「なら・・・日光が来ない地下かな?」
「確かにそうだな」

僕達がそう言つてると

「明久、多分これ地下に行く道よ」

靈夢・・・まあ、行くか

少年少女移動中

そこには・・・

「・・・すげ~」

「確かにすごいわね」

「・・・図書館?」

大きな図書館が広がっていた

「大量の本ですね」

一般的な本から幽香が言つてた魔道書まで大量にある・・・

しばらく進むと

「此処に何のようかしら?」

紫の髪の少女がいた

「あんたがレミリア・スカーレット?」

「違うわ。私はパチュリー・ノーレッジ。七曜の魔女と呼ばれてい
るわ」

「じゃあ、レミリア・スカーレットは何処に?」

「彼女ならこの館の主の間にいると思うわ」

あら・・・予想外れた・・・

「『めん・・・』

「いや普通そう思ひから仕方ないぜ」

「じゃあ行きましょ~」

僕達は来た道を戻りうつとすると

「待ちなさい」

「なに？」

「態々、侵入者をそのまま見逃すと思つ？」

確かにそうだよね～ハア・・・・

「よし！… 相手が魔法使いなら私の出番だな…！」

「魔理沙、大丈夫？」

「おう！…」

そう言つと、魔理沙はパチュリーと相対する。
そして弾幕ごじごが始まった

パチュリーは細かい弾幕を放ちながら、時折太いレーザーを四方向
に向けて放つと言つ

スタイルを取つてゐる

魔理沙はとつと持ち前の速さで弾幕をよけながら直線的な弾幕を
撃つていた

「随分とちよこまかと動くわね」

パチュリーは感心した様にそう言つ、飛ぶ速さなら多分魔理沙は3
人の中で一番早い

「これでもスピードには自信があるんでね
でも……これならどうかしら？」

パチュリーはそう言いながらスペルカードを取り出し、

「火金符『セントエルモピラー』」

上下から色々の違う弾幕が魔理沙に迫ってきた

「おつと」

魔理沙は弾幕をばら撒くのをやめ、スピードを調整しながら避ける
しかし魔理沙も避けるだけで終わるはずがなく

「ならこいつも、恋符『ノンティレクショナルレーザー』」

無数のレーザーを魔理沙は発射し、そのうち数本がパチュリーに向かう

「つー」

パチュリーは回避すると距離を置き

「スピードも攻撃の手数の弾幕の数もある・・・なら、パワーはどうかしら?..」

パチュリーはそう呟き

「田符『ロイヤルフレア』・・・」

スペルカードを発動させる
しかし魔理沙は・・・

「悪いな。私はパワー勝負が一番得意なんだ」

笑つてそう言つた

「恋符『マスタースパーク』！」

魔理沙から極太レーザーが放たれる。

同時に、パチュリーからも炎の玉が発射される。二つの技はぶつかり合い、均衡し合つただけど

「なつ！？」

魔理沙のレーザーは少しずつ、パチュリーの火の玉を押していく

「そんな！！」

「私はパワー勝負が一番得意なんだって。それに・・・」

「後ろには友達がいるんだ！！そんな友達の前で無様に負けるわけねーだろ！」

魔理沙がそう言い放つた瞬間、極太レーザーはパチュリーを呑み込んだ

極太レーザーが晴れると、パチュリーフラフラした様子で降下し、本棚の上に着地すると同時に膝を着いた

「勝つたぜ」

魔理沙は僕達にピースサインをしてきた

いじつして、弾幕ごとの勝者は決まった

紅魔館赤い霧変3 七曜の魔女（後書き）

萃香のところとか話数短くなりそり・・・それ以上に弾幕ゲームじやなくなりそうだ

紅魔館赤い霧変4

時を操る少女（前書き）

ある種のフラグ立て

紅魔館赤い霧変4 時を操る少女

「？」

あれ? パチュリーの様子が・・・

ゲホゲホツ

するとパチュリーはせき込み始めた・・・まさか！

「文！文！何処か安静に出来るといひ探して…！」
「…？ わかりました！」

僕は飛んでパチュリーに近づく

卷之三

やばい、」の子過呼吸になつてゐる—！

僕も昔幽香の訓練で過呼吸になってしまったことがあるからとれだけ危険かはわかる

僕は自分の服の袖を破り、それでパチュリーの口元あたりに覆う自分の吐いた空気を再度吸い込むという行為をさせるためだとすると少しずつだが呼吸が安定してきた

「え？ とい『めんね？』

僕はパチュリーの胸元の服を緩め呼吸しやすいうようと

そつとつて僕は図書館を出てみんなと合流した

「うひー」

僕達は靈夢の感を頼りに走っていた
しかし広いな・・・
そう思つていると

「あら、お客様かしら?」

銀色の髪をした同じ年位のメイドが現れる

「君は?」

「私はここ のメイド長をしておりま す十六夜咲夜と申します」

咲夜はそつとスカートの端を摘まんでお辞儀をする。

「それで、何の御用かしら?」
「あなたの主人に用があるの」
「お嬢様に?」
「ええ。この紅い霧を止めて貰いにね。ダメだつて言つなら力尽く
になるけど」

靈夢が簡潔に説明した。しかし・・・力尽くつて

「成程」

「で、通してくれるのかしら？」

「無理ね。お嬢様に危害を加える様な輩を通すと思う?」

そう咲夜が言い放つと違和感に包まれた。

咲夜ゆうぐりと近つき靈夢にナイフを向
しかし靈夢達は動かない。危ない!!!

僕はすぐさま靈夢達を抱え離れると

「え・・・？」

咲夜の驚きの声と共に違和感が消え

「な、明久？」

「ちよつと、明久何してゐるのよ！」

三人がなんか言つてゐなれど

貴方の能力が効かないのですか?

「やつぱつわいせの違和感は・・・」

גַּדְעָן וְעִירָה

波女達は、一ひたなかつたよ。

「靈夢達、咲夜の相手は僕がするよ」

「大丈夫なの？」

「大丈夫だよ」

僕は三人を下がらせ前に出る

「・・・お名前をお聞きしても？」

「そう言えば自己紹介してなかつたね。明久、吉井明久だよ」

「そうですか・・・なぜ私の能力が効かなかつたのか分かりませんが、時は私の手の中にある。負けるわけにはいきません」

「それはこっちもだよ！」

咲夜がナイフをばら撒くと、僕はそれを避けたり、弾幕で弾いた。幽香・・・君の特訓じゅうくんが役に立つてるよ・・・

「にしても、意外だね」

「何がでしようか？」

「弾幕だんまく」ごこで挑んで来たつて言う事がだよ。ナイフにも刺さらな
いように「コーティングしてるし」

「それはお嬢様の命令よ」

「命令？」

「ええ。侵入者が来たら弾幕だんまく」ごこでお相手をしなさいって

なんで・・・いや考へても仕方ないか

「幻在『クロック』『コープス』」

スペルカード宣告と共に咲夜がナイフを投げる
するとそれはいきなり数を増やした

くつ、僕の能力は対象に『僕』が入つてなければいけない
ナイフを投げるためだけに時を止めた場合まだ未熟なのが発動しな
かつた

「避けるだけで、攻撃してこないのでですか？」

弾幕で攻撃するも咲夜は自分周りの時を弄っているのか簡単に避けて行く

スペルカード使うべきかな・・・

ちょっと昔のお話

『明久、1つだけ私の技を教えてあげるわ』

『え？ 幽香の技？』

『そうよ。ちょうど靈力と魔力を明久は持ってるみたいだしね』

そう言って教えてもらつた技・・・

「これで最後です！！幻符『殺人ドール』」

『やり方は簡単よ。魔力を溜めてそれを放つだけ。ただ反動もあるからね？』

僕は右手を靈力で守り魔力を溜める・・・

咲夜は大量のナイフをばら撒き、そのナイフは僕に向かってくる

『名前はね・・・』

魔理沙みたいに綺麗さとかないけど

『魔砲』『マスタースパーク』『！』

『なつ！！！？』

右手を砲身とし、膨大な銀の混じつた七色の魔力の砲撃を放つ

それはナイフを吹き飛ばし、咲夜を巻き込んだ

「幽香・・・やっぱこれ威力高すぎでしょ・・・」

確認しに行くと咲夜は気絶していた

「・・・仕方ないな・・・」

僕は咲夜を抱え近くの部屋に行き咲夜を寝かせた

「さ、行こつか」

「まさか明久もあれ打てたんだな」

「腕、大丈夫?」

「大丈夫だよ」

「いや~いい写真撮れました（砲撃のシーンは自分用と幽香さんこ
売りますかね）」

こつして僕は勝利し先に進むのだった

紅魔館赤い霧変4 時を操る少女（後書き）

ちなみに喘息、過呼吸については私もそのうなでそれで書いています
これでは服で代用していますが、紙袋で少し隙間を作つて口に覆つ、
という対処が一般的です。理由は自分の呼気を再び吸氣した結果、
血液中の一酸化炭素濃度が上昇して症状が和らぐという理論がある
からです。

ただし、鑑別診断がない場合は危険な方法であるのでお気をつけ
ください

詳しくは [Wikipedia](#) で

ちなみに、マスパで重なつてるのは過去幽香が言つた言葉と明久の
言葉を重ねてるだけです

紅魔館赤い霧変5 運命を見ぬ少女（前書き）

やつぱり戦闘シーンは書き難し

紅魔館赤い霧変5 運命を見る少女

「…………」

靈夢が立ち止まるところには他とは作りの違つ扉

「…………」

「じゃあ入るわよ」

『ドカツ』

いや、足でドア開けちゃダメでしょ

「あらあら、随分と礼儀知らずな侵入者も居たものね」「…………あなたが此処の主かしら？」

「そうよ、私が此処の主……レミコア・スカーレットよ」

そこには大きな椅子に座り、蝙蝠の様な羽を生やし、変わった帽子を被つた……

「…………」

「そこの彼方、聞こえてるわよ……」

「あ、ごめん」

「ふん……え？」

「うん?…びついたんだわ?……」

「なんで……運命が見れないですか?……?」

なんか動搖してるけど・・・

「幾つか聞きたい事があるんだけどいい?」「えつ、か、構わないわ。言つてみなさい」

「まず一つ。何で紅い霧を出したの?」

「私は日光が苦手でね」

「それで紅い霧を出して防いでいると?」

「そ。正解」

「二つ目。何で懲々お前の部下達に弾幕」(ヒード戦)で戦つよつて命じたのかしきり?」

「その方が面白いのでしょうか?」

「面白い?」

「そ。遊びみたいなもの何だから?.....」

遊び半分でこの異変か・・・いい迷惑だね・・・

「じゃあ最後に。この紅い霧を今すぐ止める気は?」

「ないわね」

「そう・・・ならブチ飛ばすしかないわね」

「靈夢がこの頃口悪くなつてこくよ・・・文・・・」

「あはは、がんばってください、明久君」

「それに・・・」

それに?

「そここの男の子にも興味あるからね・・・」
「訂正するわ。こいつは私が絶対ぶつ飛ばす・・・」

「うひして僕は付いて行けぬまま、弾幕」(ヒード)が開始した・・・

先手を取つたのはレイコアだった

大、中、小の三つの弾幕を纏め放つて来た

靈夢はそれを避けながら、隙を見つけては弾幕を飛ばす

「へえー思つていたよつやるわね」

そつと数を増やし、スピードを早くする
しかし靈夢はいまだ被弾していない

「ふーむ……なら、これなりぢつかしさ?・運命『ミゼラブル』
「…………」

先端が矛になつた紅い鎖が何個か現れ、靈夢に向かっていく。
靈夢はそれを避けるも追尾型なのか追いかけてきた

「仕方ないわね、神技『八方鬼縛陣』」

靈夢が札を投げるとそれは靈夢を囲う様に障壁を出し、鎖をはじく
飛ばした

「ふふ、そつでなくちゃね……」

「…………」

「?明久、どうしたんだぜ?」

「いや……なんていうか……いやな予感でさうのかな……
「いやな予感ですか?」

「…………」

「…………」

僕はこの戦闘が始まつた時から嫌な予感が拭えなかつた・・・

「お、結構終盤かな？」

魔理沙がそう言つと

「神靈『夢想封印』」

『紅符不夜城レッド』

一つの弾幕がぶつかり合ってかあれ弾幕と言えるのか？まあいいや

『ウニ』

競り負けたのはレミリアだつた。よしこれで勝て・・・！？

靈夢達は気づいていない

「この！！！神槍スピア・ザ・ゲン g・・・
「靈夢！レミリア！避ける！！」

— !? 「」

僕の声に驚いたのか一人はそこから飛び退く
するとさっきまで一人がいたところの下の床が、いきなり出てきた
『大剣』によつて崩された

「お姉ちゃん、こんな樂しかった」と少しずきなになんひどこじ
やない」

「」には笑つ金髪の結晶のような羽をした少女がいた

「フ、フラン……」

「あれ？ 結構人間がいるね」

その少女は僕達に気づき

「あ、わしき声あげたのはお兄さん？」

「…………やうだけど……」

「へへ・・・・・」

「やめなさい……フラン」

ニアガ叫ぶもとの子……フランは無視し

「お兄さん遊びましょう」

「…?」

僕は文と魔理沙を弾き飛ばすとフランは大剣を振り下ろしてきた

紅魔館赤い霧変5 運命を見る少女（後書き）

寒すぎてタイピングがつづけられません

紅魔館赤い霧変6　目を覚まして（前書き）

前回のあらすじ

赤い霧の犯人レミリアと会合

靈夢とレミリアが戦う

勝負が決まりかけたところで乱入者が
乱入者は明久に剣を振り下ろした

紅魔館赤い霧変6 目を覚まして

「明久！？」

「明久君！！」

二人が叫んでいる

「へ～これ避けちゃうんだ」

僕は当たるギリギリで大剣を回避していた

「いきなりな挨拶だね。君は？」

僕はいつでも動けるように構える。隙を見せたら負け、これは幽香
がよく実践してくれた・・・（遠い目）

「？私？あ、フラン、フランドールスカーレットだよ」

「フランか・・・僕は明久だよ」

「明久か～じやあ・・・」

笑っている・・・けどこれは・・・

「カンタンニコワレナイデネ？」

次の瞬間大量の弾幕がばら撒かれる

「明久！！」

「靈夢来ないで！！」

「でも・・・」

「大丈夫だから」

僕は弾幕を回避していく。

数が多いけど、ばら撒き方が適當すぎる。これなら幽香の訓練のあれのほうがきつい

しかし油断はできない。

やり方は適當だが、威力があり得ないのだ。
さつきから壁に大穴開けてるし

「あはは、あきひを避けるね~」

「そりゃあね」

「なら・・・禁忌『レーヴァ テイン』」

フランはまた大剣を呼びだし振り下ろしてきた
だが直線的な攻撃ならよけれれる!!

「これもダメか~禁忌『クランベリートラップ』」

先ほどより正確に弾幕が狙つてくる!!

「くそつ!!」

僕はなんとか避けるも数発被弾してしまひ

「痛~!!~靈力を込めたのにそれでこれ!?!?」

左腕がジンジンと響く、「れじや動かしにくくな・・・

「まだまだだよ~禁忌『過去を刻む時計』」

時計の針のような弾幕が、『反時計回り』しながら飛んでくる

「やばつ！－魔砲『マスタースパーク』」

僕は1箇所に穴を開けそこを通った

「わ～そんな避け方するんだすごいね」

楽しそうに笑うフラン・・・だけどなんでも・・・

「秘弾』そして誰もいなくなるか？』『

するとフランが透けだした・・・
な・・・耐久スペル！？

「明久危ない！－！」

魔理沙の声に反応してそこを飛び退くと、僕がいた場所に弾幕が通り過ぎた

「魔靈『耐え抜く守り』」

僕は靈力で身体能力を強化し、魔力でオーラのように体を包む。
これで当たったとしてもそれなりに耐えれる・・・
しかし・・・

「へ～もう攻略わかつたんだすごいね
いや、たまたまなんだけどね」

意外とこれがスペルブレイクの条件らしく、フランは現れた

4人で・・・

「な・・・」

「禁忌『フォーオブアカインド』」

「がんばって」

「今からの」

「弾幕」

「避けてね」

「『禁弾』スター ボウブレイク』！！」

直線的レーザー・・・僕はそれを避ける

一つ、二つ、三つ、四つ・・・しかし・・・此処で僕は気づいてしまった

僕が避けたうち一本が靈夢達に・・・
そのあとは本当に何も考えていなかつた・・・僕は脚力を強化し、走つて、そして靈夢達の盾になり、その弾幕により『左胸』を貫かれた・・・

「あ、明久・・・？」

ありや・・・ちょっと声が聞こえにく이나・・・
体もとても痛い・・・

「冗談やめてよ、明久。なんであなたが・・・」

みんな驚いてるな・・・でも火事場のクソ力つてのはホントにあるみたいだ。

まさかあの距離を一瞬で詰められるとは思わなかつた・・・

やばい目も開けれなくなつて・・・

「お願ひ、明久！―目を覚まして―！」

頬に当たる温かい雫・・・あゝ泣かしちゃつたな・・・

僕はそのまま闇に落ちて行つた・・・

s.i.d.e 魔理沙

「嘘だろ・・・」

明久が・・・死んだ?
な、なんでこいつが・・・

「まだだよ！―！」

いけね！―！いつのこと忘れてた！―！

フランは一人になり

「禁忌『レーヴァテイン』」

大剣を振り払つてきた

『ガキンッ！―！』

しかしその大剣を止めたのは意外な奴だつた

「お、お姉さま?」

「レミリア……あんた……」

それは槍で大剣を止めるレミリアと結界を張り、衝撃が来なによつしていいるパチュリーだった

「結界を張つてゐるから、その子の治療を早く……」「でも私治療に關しては……」

「やーーーーーう時何もできないなんて

「なら手伝ひなさこーーーまだ間に合ひますよーーー」

「あ、おづーーー」

「お姉さま……なんで……」

「明久には助けられたからね、私は恩は残しきたくないの」「レミリア……」

「それに……フラン、やりすぎよ。それにあなたには今日は外出許可は出してないはずよ」

「なんだ……」

「……」

「なんでいつもやつ私をの楽しみを邪魔をするの……」

「フラン……」

「もうヤダ……」

！？霧園気が……変わった？

「もうお姉様なんか……こんな世界なんか大っ嫌い……」「すべて……」

「スベテコワレチャエ……！」

「パチエ、明久の治療、頼んだわよ」

「任せなさい、レミィ」

「靈夢」

「何かしら？」

レミィアは泣きやんだけ靈夢に話しかけた

「ああなると一人じゃ対処しにくいのよ。手伝ってくれないかしら？」

「いいわよ。とりあえず一発は殴らないと氣が済まないから……」

靈夢が・・・黒い・・・

「すいません遅れ・・・なんですかこの状況」

「咲夜すぐに包帯とか持つてきて……」

「え？・・・！・・・わかりました！至急に……」

お願いだ！！間に合つてくれよ、明久！！

side 明久

こじは・・・ビヒヘ

「あら？ また来たのね」

この声は聞き覚えがある
僕は目を開いた・・・そこには

「へへ今日はちゃんと『意識』まである状態で来たんだね」

金髪銀眼の少女と

「はじめまして、あと一うつしゃい』』へ

巨大な『扉』が、あつた

紅魔館赤い霧変6　田を覚まして（後書き）

まさかの明久瀕死・・・え？そんなの想像ついた？
わかりやすくてすみません・・・

紅魔館赤い霧変7　『』と真理の扉（前書き）

そういうや明久は左利きですが右も使えるからあれば両利きになるのかな？

紅魔館赤い霧変7『』と真理の扉

s.i.d.e 魔理沙

私はパチュリーを手伝いながら思った

「あの二人すげーな・・・」

レミコアと靈夢はまた4人になったフランをと対等にやり合いで、ましてやそのうち一人を倒していた。

「魔理沙、魔力を送つてちょうどだい」

「ああ、わかつ・・・！」

その時気づいた。まさかの流れ弾がこっちに来てるのだ

「やば・・・」

『バシンッ！』

しかし流れ弾はこっちまで来なかつた

「流れ弾は気にしないで、明久の治療をすすめなさい

「え・・・文？」

文が突風を起こし弾幕を消しているのだ

「お前、口調が・・・」

「それよりも早く。こっちは・・・怒りを抑えるので必死なんです

から・・・

文を見ると腕を強く握りしめていた
さつきから黙つていたのは怒りを抑えるためか・・・

「パチュリー様、新しいガーゼです」

私も今やるべきことをしなきゃーーー！

side 明久

「えつといには・・・

白い空間、ホント何も無いあの扉以外

「いじは『』。すべての始まりにして終わりを記す場所」
「『』？」

「そう。でも珍しいのよ?ここに来ようとする人とかはいるけど、
無意識にこことつながる人間なんていないんだから」

「それってもしかして・・・」

「そ。あれは夢であつて夢じやない。現に君は異能に目覚めてるで
しょ?」

「この能力か・・・」

止まつた時を移動出来たりできるこの能力・・・

「そう君達で言つと『あらゆる状況下で我を貫く程度の能力』・・・

此処に繋がり続けたことによつて君が覚えたもう一つの能力

「もう一つ?え、これだけじゃないの?」

「それはここに来た」とよつて覚えてるのよへりつはあなた

本来の能力よ」

「僕本来の……あ、そつだ……此処からびりびり出るのー?」

時間はあまりないんだ

「さあ?でもびりして?」

「僕は戻らなきゃ……みんなを助けるために……フランを助けるために……」

「なんで?彼女は君を殺そうとしたんだよ?」

「あの子は……笑いながら心で泣いてた……」

そう、あのとき感じた違和感。それは悲しみだ……

「だから戻らないと……」

ホント!ここには何にもない。あるとしたら……

「…………」

この扉だ!!

「無理だよ、その扉は神ですら開けれない。人間の君が開けるわけない」

あの子はそういう言つてくるけど関係ない

「僕は戻るんだ!!靈夢達があそこで待つていいー!」

靈夢や魔理沙だけじゃない!!あそこには慧音や幽香、妹紅達もい

る！－

「それに僕はあの子達とこれからも関わりたい！－！」

紅魔館の人たち、確かに事件を起こしたけど悪い人たちじゃなかつた

「そして・・・僕はあんなに悲しそうな子たちを見捨てなんてできない！－」

フランが出てきたとき一瞬悲しそうにうつむいたレミリア

笑いながらも悲しそうにしていたフラン

「神でも開けれない？人間だからなおさら無理？そんなもん・・・」

『ギ・・・・ギギッ・・・』

「え・・・・？」

「そんなもん関係あるかあああああ！－！－！」
『ギギギギ・・・』

少しづつ、本当に少しづつだが扉は開きだした

「う、嘘・・・今まで此処に来る者は確かにいたけど・・・この扉を開けるなんて・・・」

少女の驚いた声が聞こえる

「あは・・・アハハハハハハハ」
「え？」

いきなり笑いだしてどうしたんだ？

「まさか、想いだけでこの扉を開けるなんて・・・神々が聞いたら発狂するよ！！」

「え？ え？」

「明久そこは帰り道ではないよ」

「ええええええええええ！」

そんな！ 今までの努力は何だったのさ・・・

「それは『真理の扉』。『』の中核にして創造神の部屋『創造神？』

「この世界、神々、命、お話、それらすべてを作りだした神だよ。絶対神とも言ひ」

「へ～」

「いや、へ～つて・・・明久・・・」

「なに？」

神妙な表情で彼女は話しかけてきた

「その扉を開いた以上、君は人を、神を超えた物を手に入れるはずだ・・・それは要するに人をやめるのとほぼ同意義。それを君は・・・・」

「その力ならみんなを助ける？」

「え？ あ、うん助けると思うよ」

「そうか・・・ならよかつた」

「良かつたって・・・人をやめることになるかも知れないんだよ！」
？」

なんでって・・・

「その力ならみんなを守れるかもしねないんでしょ？ならここと
どまつても意味ないよ。

それに誰が何と言おうと僕は僕がそう思う限り人間だ」

「・・・・・」

「その力によつて周りが不幸になるならそれを僕は止める。でも死
ぬ気なんてさらさらないよ」

「なんで？」

「だつて、僕が道を外したとしてもそれを戻してくれる友達がいる。
だから僕は進み続けるんだ」

「そつか・・・」

さて・・・どうじょうかな・・・

「願うといいよ帰りたいと

「願う？わかつた。君はどうするの？」

「私はここで君が作るお話を見てこることにするよ

「そつか・・・」

「明久・・・」

「なに？」

「君は絆を力に出来る。それは君を導く光になる・・・友達を大切

にね？」

「うん。またね」

「うん」

僕はそのまま意識光に手を伸ばした

s i d e ? . ? . ? . ?

「またね・・・・・か」

此処にたどり着くだけでも奇跡だつて言ひの「」の扉を開くなんて・
・

それにあの力は・・・

「偶然とは言え『真理の扉』を開けてしまつた君は選択に迫られる・
・でも、私は信じてるよ明久・・・」

君ならその力を使いこなし、いつかこの扉を完璧に開くってね

s i d e 明久

「う・・・ん・・・・」

「明久!!!」

「え？まだ術終わつてないのに・・・・」

魔理沙とパチュリーの声が聞こえる

「あ痛たた・・・・」

「いや、心臓あたり貫かれたんだから痛いじゃ済まないでしょ

「あ、咲夜？」

視界は線と点が見える・・・でもこれがなんなのかすぐに理解できた

「咲夜……」

「何かしら?」

「ナイフ貸してくれない?」

「え……はい」

僕はナイフを受け取ると僕はフラン達のところへ歩きだした

「あ、明久!?」

「行くんですか? 明久君」

「うん、あの子たちのためにもね

「わかりました」

「文?！」

僕は歩いて行くと

「「あ、明久!?」」

「オニ—イチャン?」

レミリアまで驚いてるよ

「レミリア、靈夢下がつて

「な、何言つてるの!?!」

「どうする気? 明久」

「お願い、僕に任せて」

「・・・・・わかったわ。行くわよレミリア」

「え、でも……」

「明久に任しあげば大丈夫よ」

「・・・・わかったわ・・・・フランを・・・・」

「大丈夫だよ」

僕はそう言つて二人を下がらせた

「オニイチャン・・・」

「ごめんね」

「エ?」

「いや、遊んでたのに途中で抜けちゃつて

「アソ・・・遊んデクれるの?」

「うん!さあ、来い!!」

「・・・うん!..禁忌』レーヴァテイン』!」

さっきまでなら避けてただろう・・・
しかしもう避けない!!

僕は大剣に向かってナイフを振る

『キンツ、バキツ』

「・・・え?」

僕のナイフは大剣を切り裂いていた

「・・・すごい・・・」

「さあ・・・フラン第二回戦だ!!」

僕の眼は爛々と蒼く輝いていた

紅魔館赤い霧変7　『』と真理の扉（後書き）

やべえ・・・読み返したけど恥ずかしいわ・・・

紅魔館赤い霧変8 約束（前書き）

明久VSフラン2回戦

紅魔館赤い霧変8 約束

「行くよフラン！！」

「ウン、禁弾『スター・ボウブレイク』！！」

一直線に僕に向かつてくるレーザー
僕はレーザーに見える線を切り裂いた。するとレーザーは僕を中心
に半分になる

「禁忌『フォーオブアカインド』！」

さてまだまだ！！

s.i.d.e 靈夢

「やつぱり心配だぜ・・・」

「任せろって言つたんだから任せときなさい」

「でも妹様は本気ですよ？」

向こうには4人のフランと乱闘する明久

「まあ明久君なら大丈夫でしょう

「どういう意味？」

「確かにパチュリーの言つとおりだな。どういう意味だ？」

「なんせ彼の面倒を見ているのはこの幻想郷でも屈指の妖怪ですよ

？」

「え・・・何を言つて・・・」

「いや、文の言つてることも間違つてないわ

「なんでもう言えるのかしり?」

だつて・・・

「明久から妖力の残滓を感じるもの」

「なるほどね・・・それでも貴女達の信用はおかしいと思つわよ?」

「そうでもないわよ。彼は紫ですらまともに近い状態にさせたるほどの人間よ?」

「え・・・・あれをか?」

「・・・・・ええ」

それ以上に・・・

「あいつは・・・何かを助けようつて時が一番強いもの」

頑張つてね明久

s i d e 明久

「「「いくよーー!」」」

なんとか一人削つたけどきついな・・・・・そつだ・・・
僕は少し動きを変えた・・・

「禁弾『スター・ボウブレイク』」

「禁忌『恋の迷路』」

「禁弾『過去を刻む時計』」

よし、出来た!!

「魔砲『マスタースパーク』」

僕の砲撃と弾幕はぶつかり合い視界が曇る

「「」コレは・・・」

「//Hナイ

「ドコ?」

「此処だよ」

「「」え?」「

僕が動きを変えた理由それは「人が並ぶように立つようにするため

!!

僕はレーザー状に弾幕を撃つとそれは「人を貫いた

「スゴイネ、おにいちゃん。ならこれは?」

「え?」

「きゅっとして」

「!?」

フランが右手をかざした瞬間僕は瓦礫に隠れた

「ドカーン」

『ド、ツ!』

「な・・・」

「これもヨケチャウンダネ」

「すごい能力だね」

でも・・・

「視えた・・・」

「え？」

僕はフランの前に立つた

「な、明久何してるの！－フランの能力は・・・」

「大丈夫だよ、レミリア」

「オニいさん？アタツチャウヨ？」

「大丈夫だよ」

「なら・・・」

フランは能力を発動するが

『キーンッ』

「・・・え？」

「フランの能力が・・・」

「効いてない？」

「ドゥシテ？」

どうしてって・・・

「簡単だよ、能力を発動する前に殺しただけさ」

「コロシタ？」

「そう」

この眼は『殺す』ということに特化している。それは生物や物体に限らず、能力にも干渉するみたいだ

「ねえ、フラン」

「ナニ?」

「これが終わったら、一緒に外に遊びに行こう」

「え?」

「そしてみんなと……お姉さんと一緒に遊びに行こ」

「……無理だよ……」

フランが泣き声にならながら涙を落とした

「無理だよ、ワタシ」^ノなんだからみんなを壊さうとしている……

「無理じゃないよ」

「でも……」

「もしかせなかつたら僕が止めてあげる」

「え?」

「だつて友達だもん。助け合のは当たり前でしょ?」

「…………」

「あ、僕もさすがに疲れて来たからね」とりあえず……これがラ

ストだ……」

「…………」

お願いだ……本当にこの眼が何でも殺せるとここのな

「…………」

「行くよ。OEDO』495年の波紋』――

「うわ……」

周りを覆い尽くす弾幕の雨……でも

「進む！…！」

僕は避け、斬り払いながら時折被弾しながらそれでも前に進む

彼女達を縛る根源を教えてくれ…

斬り払いながらも僕はフランを視続ける

その狂気を…！

見ろ、見ろ、ミロー！

その時、僕ははつきりと見えた。
左胸の点の下の禍々しく光る輝きを…・確証はない…でも核
心はあつた。

「視えた…・・・」

殺し切つてはだめだ…・・・

「…・虹色？・・・」

「フラン…・・・」

僕は弾幕の雨を突き抜け、フランの前に出る

「それが…・君達を苦しめる鎖くさりというのならば…・・・」
「…・・・」

僕は君の…・君達のために…・・・

「僕は、運命きみたちを殺すくつてみせる！――！」
「・・・・うん！」

そして僕は彼女の胸に・・・・ナイフを突き立てた

紅魔館赤い霧変8 約束（後書き）

次回

紅魔館赤い霧変 その後

紅魔館赤い霧変 その後（前書き）

赤い霧変最終話です

紅魔館赤い霧変　その後

僕はまだ今妹紅と慧音に説教を受けております……
しかないとは思つ……死にかけたりしたしね……

「聞いてるのか!!」

でも……一番つらいのは……一人が泣いてることだ……

「ホントに……」めん
「お願いだ……」んなことやらないでくれ……
「……それは……約束できないかも……」
「なら……死なないでくれ。これだけでも守ってくれるなら、私はいい」

「妹紅!?」

「だつて、明久もそんなに子供じゃないんだ……
「……そうだな……私からも妹紅と同じだ」
「うん、それは絶対に守るよ」

やつぱり僕はいい家族を持つたと思つ（義理みたいなもんだけど）

時間は飛んでただ今宴会中

「はあ、本当にどうなるかと思つたわよ。いきなり貴方はフランを刺すんだもの」
「あははは……」
「まあ、そのおかげでの子も……」

結果から言おう

僕はフランを刺したが彼女は死なかつた。

しかし変わったことがあり、ユミリアいわく、フランの狂気に飲みこまれる運命が見えなくなつたそうだ

そう、あの時突いた点は、フランの過剰な狂気だつたというわけだ

「アリスが」

「どういたしまして」

「おわづか」

向こうからフランが走つてくる、今度からひやつて外にも出れる
そうだ・・・

「あきひれ」
「何フラン?」

「ありがとうね」

フランは僕の膝に座っていた。
妹がいたらこんな感じなのかな?

その言葉の後、頬に柔らかい感触が・・・え？

卷之三

「あははは、お姉さまが怒つた！」

卷之三

「ため息」ぐと幸せ逃亡^{トトコ}わよ?・
「言わないで紫

今更彼女がいきなり現れようと驚かん！！

「で、どうするの？」

「2・3日したら学校の準備しなきゃだから戻るよ」

「そう・・・」

「たまには来るが、此処は第一の故郷なんだから」

「ふふ、ありがとうね」

僕は追いかけっこする一人を見ながら微笑むのであった

おまけ

宴会翌日の朝

「・・・・・・」

周りは僕に抱きつく少女達・・・

「どうしてこうなった・・・」

帰宅後次の日もやっぱり同じだった

そして

「私にそのこと黙つてるなんて覚悟はいいわね？（一ノ瀬）」

「すいませんでした」（土下座）

幽香に怒られたのは予想道理だった

紅魔館赤い霧変 その後（後書き）

次回

ただ今工作中

東方妖々夢終わりない冬変 予告（前書き）

それは5月過ぎたころ・・・

今だ幻想郷は冬だった・・・

明久達はこれを解決するために新しく咲夜を迎え、異変解決に乗り込むのだった

東方妖々夢終わらない冬恋 予告

「5月になつたのにまだ冬だなんて・・・」

「春妖怪が来ないわね」

「お嬢様から明久を手伝つてきなさいって言われてね。まあ、私個
人としても手伝うけど」

「そちら辺をフリフリと飛んでいたらあんた達を見つけてね。ちょ
っかい掛けてやううと思ったのよ

「私の名はレティ・ホワイトロック。冬の妖怪よ」

「あつ明久様、お久しうりです」

「あら、解つてないわね。弾幕はブレインよ」

「春ですよー！ー！ー！」

「私達はこれから冥界に行つて今度行つ「コンサートの練習をするからよ」

「妖怪が鍛えしこの楼観剣に……断てぬものなど、あんまりない！」

「「」の西行妖が満開になれば封印されている存在が解き放たれるらしいのよ」

「うそ……なんで封印が……」

「私はただ……」の力が……いやだつた……」

「それも含めて貴女を作つてるんだ……それを否定してどうする……！」

「

「明久さん……受け取つてください……」

「お前の死を操る力と僕の殺す力。どっちが強いかはつきりさせてやる……」

「これが……」

「モノを殺すつていうことだ！！」

東方妖々夢終わらない冬夜

「僕は絶対に貴女を死なせやしない！－」

東方妖々夢終わりない冬変 予告（後書き）

予告です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6091z/>

僕と幻想郷と召喚獣 外伝

2011年12月25日22時58分発行